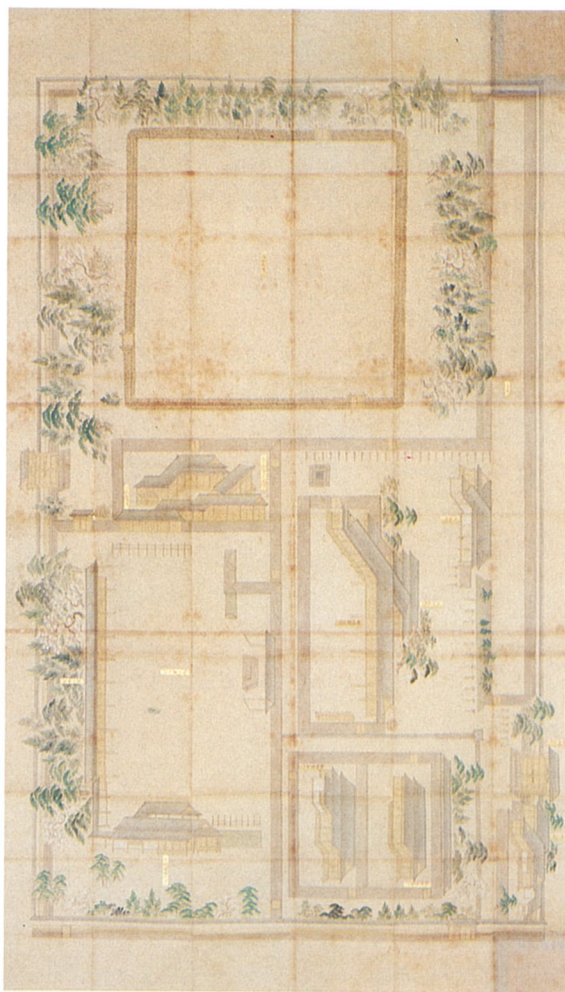
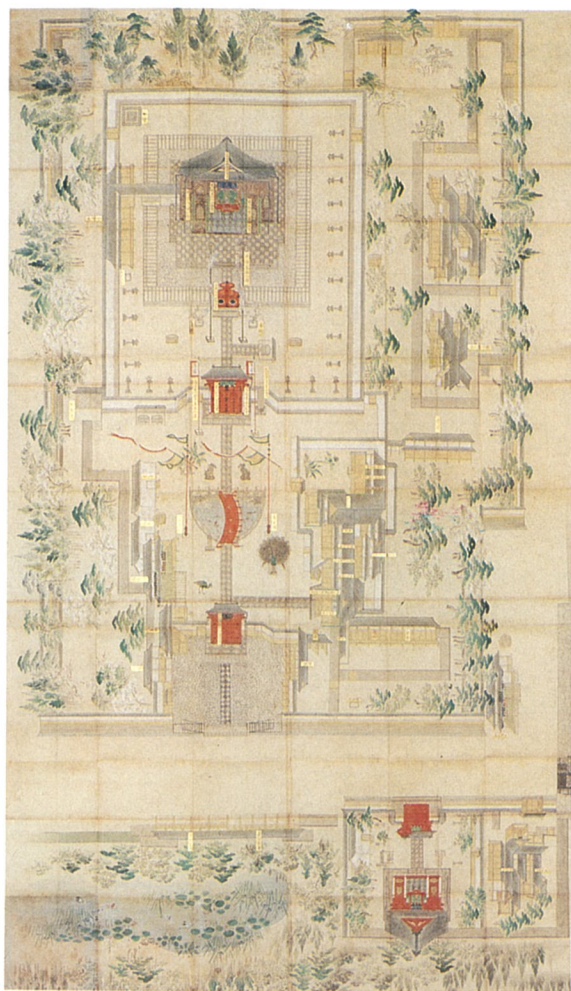


蓬左

HÔSA No. 46

名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hôsabunko

1991. 10



薩州府下聖堂之図 江戸後期 1枚 157.0×84.5cm

薩州府下演武場之図 江戸後期 1枚 154.2×84.5cm

(解説は3ページ参照)

Ⅱ．古絵図にみる近世大名の生活と文化

(i)1991. 10. 5～23、(ii)10. 26～11. 13 (iii)11. 16～12. 8

Ⅲ．古城図・合戦図と尾張藩の軍制

古城図・合戦図(i)1992. 1. 5～26、同(ii)1. 30～2. 19、尾張藩の軍制2. 22～3. 15

前期では、尾張徳川家旧蔵の古絵図の内、世界図から地域図におよぶ古地図を中心に御紹介しました。後期は、Ⅱ．古絵図にみる近世大名の生活と文化、Ⅲ．古城図・合戦図と尾張藩の軍制と題して、様々な目的で作成された絵図を御紹介します。

江戸時代の大名とその家族は、公私ともに江戸と国元の二重生活を送っています。尾張徳川家の場合も公務と生活の中心となる名古屋城内と江戸市ヶ谷の上屋敷をはじめ、藩主の休息や、将軍、大名の接待の場となる下屋敷、狩や湯治のための郊外の御殿、前藩主やその夫人、家族のための屋敷など、主なものだけでも尾張5（名古屋城内、御下屋敷、熱田浜御殿、水野御殿・横須賀御殿）、江戸3（市ヶ谷屋敷、戸山屋敷、麹町屋敷）があり、その多くが数千、数万坪におよぶ広大な敷地を有していました。これらの屋敷では、災害や火事による建てかえ、建物の移転なども頻繁で、その度に屋敷の図面には訂正が加えられたり、新しく作成されたようです。こうした図には、1間四方の升目がひかれており、かなり精度が高いものが多く、細かく記入された部屋割りや敷地割りから、当時の生活を伺うことができます。

大名にとっての最大の公式の場といえば「殿中」、＝江戸城内であり、幕府行事への参列でした。江戸城内の様子を熟知していることはもちろん、そこにおける席次、作法は最重要事項です。江戸城内の平面図や、儀式の際の席次、城内の作法を図示したものが数多く残されているのは、このためといえます。

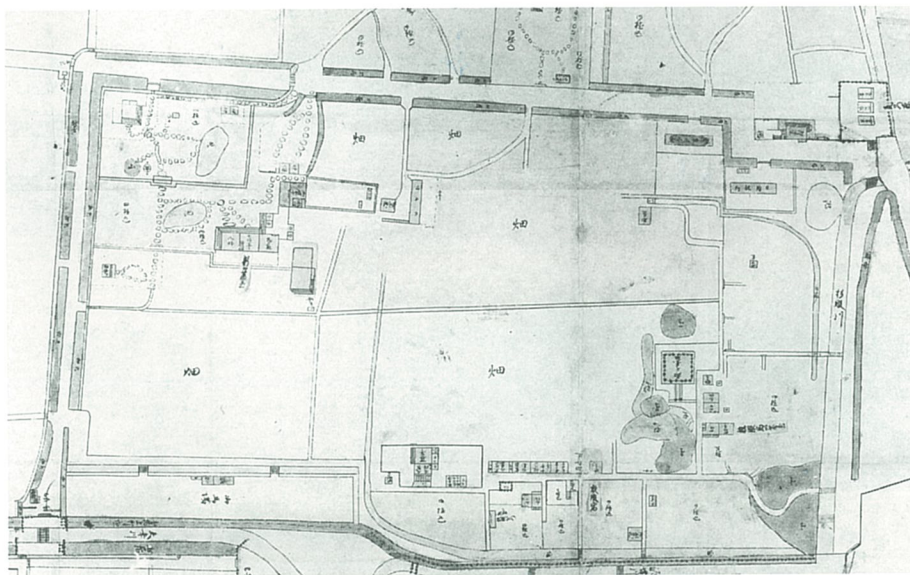
さらに、藩主の手元蔵書の中には、御所内の部屋割り図や、儀式とくに即位式にかかわる図が多く、大名にとっての基本的心得として要求されたことを示すとともに、宮中への関心の高さも伺われます。

また書画、和歌、能、茶道、華道、香道など教養としてはもちろん、処世術でもあった多くの諸芸に

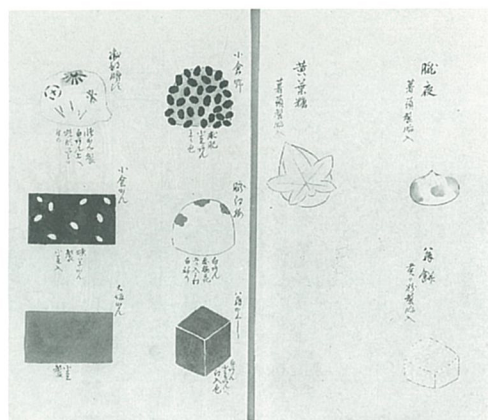
下御深井図面(部分)

159.2×175.0cm

嘉永2年 1枚



名古屋城二の丸北側、堀をへだててひろがるかつての沼地下御深井（したおふけ）に造られた庭園の図の一部。江戸時代初期、ここには自然の風景を写した庭園が作られたが、10代藩主斉朝の治政（1800～27）には、庭内に門前町、宿場町を再現するという前衛的な庭づくりが行われた。本図は、嘉永2年（1849）14代慶恕（慶勝）による藩政改革の際、改造が行われた時に作成された図。左上に新しい御茶屋、右下の部分が宿場町杉服町で、八百屋、鍛冶屋などの文字が見える。



とって、絵図類は教材として欠かせないものです。菓子の見本帳、起し絵風に仕立てられた茶室の雛型、炭型や生花の図、絵手本等々大名文化の華やかな部分を伺わせる図が伝えられています。

藩や大名家にとって、領内の軍備、防衛は、最も重要な問題の一つであり、尾張徳川家旧蔵の絵図の中に軍制や軍学にかかわるものが数多く伝えられているのは当然のことといえます。

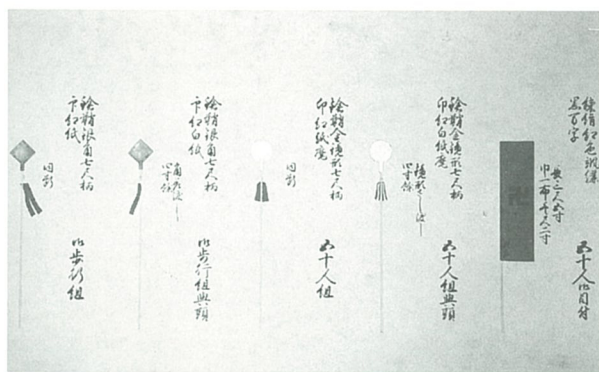
江戸時代、武士の間では古城跡や古戦場跡を散策することが日常よく行われ、古城図や合戦図は軍学の研究対象として利用されました。一方、幕府は、全国各藩の城と城下町の構造を把握するため、正保元年（1644）、国絵図の提出に合せて城絵図の提出をも命じ、正保の城絵図を作成しています。

現在当文庫に残る尾張藩旧蔵の古城図は全図に及び約140点、合戦図・古戦場図が約50点。とくに古城図は、尾張藩が領内の防衛拠点として測量、作成したと考えられるものや、幕府編纂の正保の城絵図に近い内容をもつものが含まれるなど、単に軍学の教材用というだけではなく、東西の要衝に位置する御三家筆頭としての尾張藩の立場が反映されているように思われます。

ところで、尾張藩の軍制、とくに藩士の軍備負担を定めた軍役規定は、寛永10年（1633）を最初とし、以後、平和の世が続くに従い軽減が計られています。しかし、18世紀末、沿岸に外国船の出没が頻繁になるにおよび、老中松平定信は、諸藩に海防の強化を命じました。寛政6年（1794）これを受けて尾張藩では大規模な軍制改革が行われ、軍役規定はじめ、有事の際の出動、配備体制が定められました。

この後、何度か改訂が行われ維新期には、西洋式の調練が導入されますが、最後まで軍制の基本となっていたのは、寛政の軍制でした。このため、この軍制については、出動配備の場所、人数、武器、隊の編成などが細かく規定された記録が残されており、これにあざやかな色彩で精細に描かれた隊列の順位、戦陣の際の配置、各隊の旗差物、馬印などの図が添えられています。

このように、尾張徳川家旧蔵図には様々な絵図があります。これらは、観賞用や装飾用に作成されたものではなく、あくまで必要に応じて作成された実用性の高いものです。図式化されていて具体的表現に乏しい面もありますが、作成された背景を通して江戸時代の大名家をめぐる様々な側面を見ることがができます。



御家中役旗差物之図 寛政6年 1卷

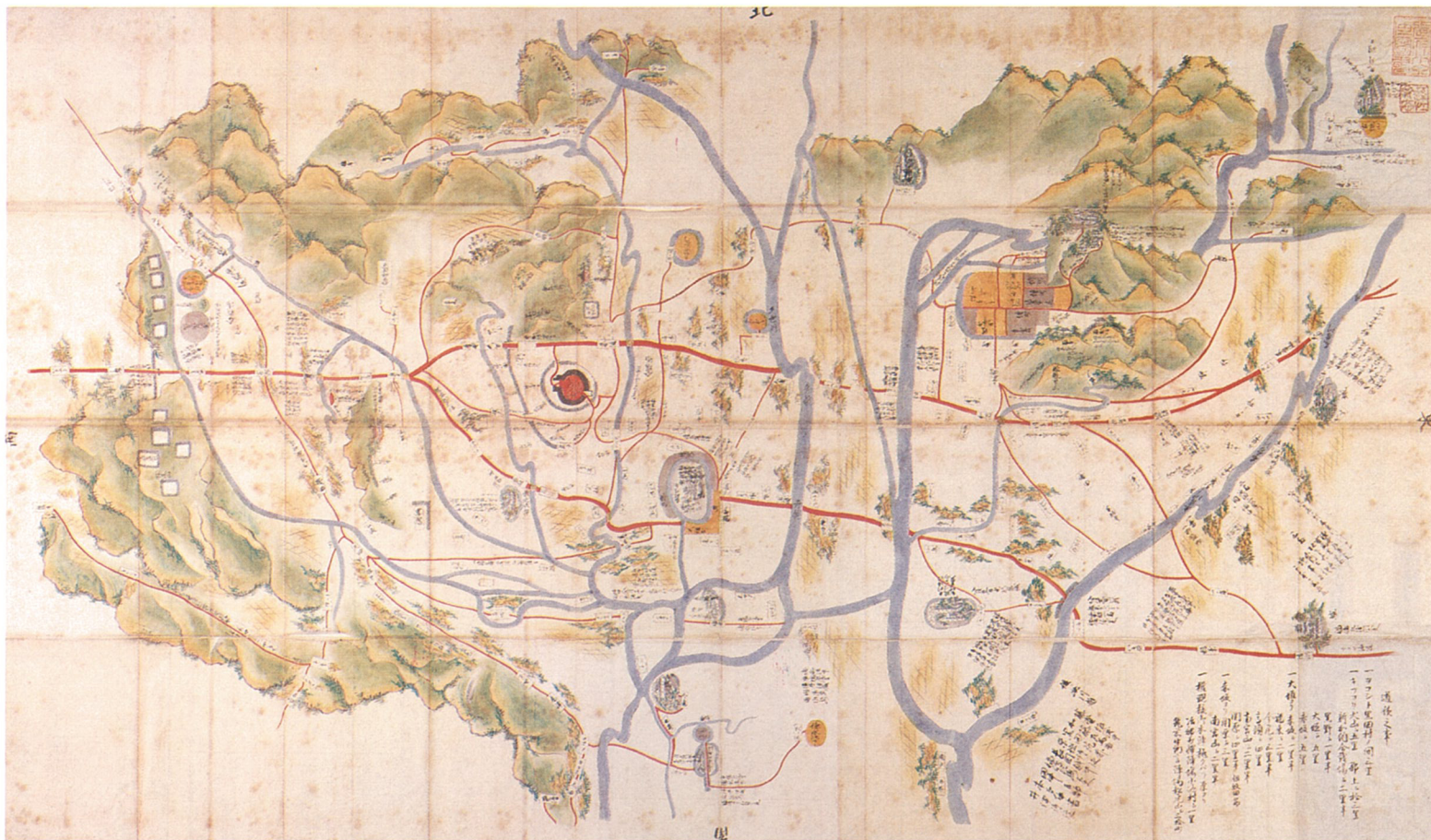
(表紙口絵解説)

薩州府下聖堂之図 江戸後期 1枚 157.0×84.5cm

薩州府下演武場之図 同 1枚 154.2×84.5cm

初期の薩摩藩藩校之図。安永2年(1773)、八代藩主島津重豪(しげひで・1745～1833)は、7500余坪の広大な敷地に、聖堂と演武場(武芸稽古場)を建設、天明6年(1781)からは、それぞれ造士館、演武館と称した。江戸の湯島聖堂を範とした聖堂について、橘南谿(1753～1805)の「西遊記」が「本殿皆朱塗にて金銀の金物まばゆき程なり、講堂も数百畳を敷て廣大」と記した絢爛豪華な様子が本図からもうかがわれる。

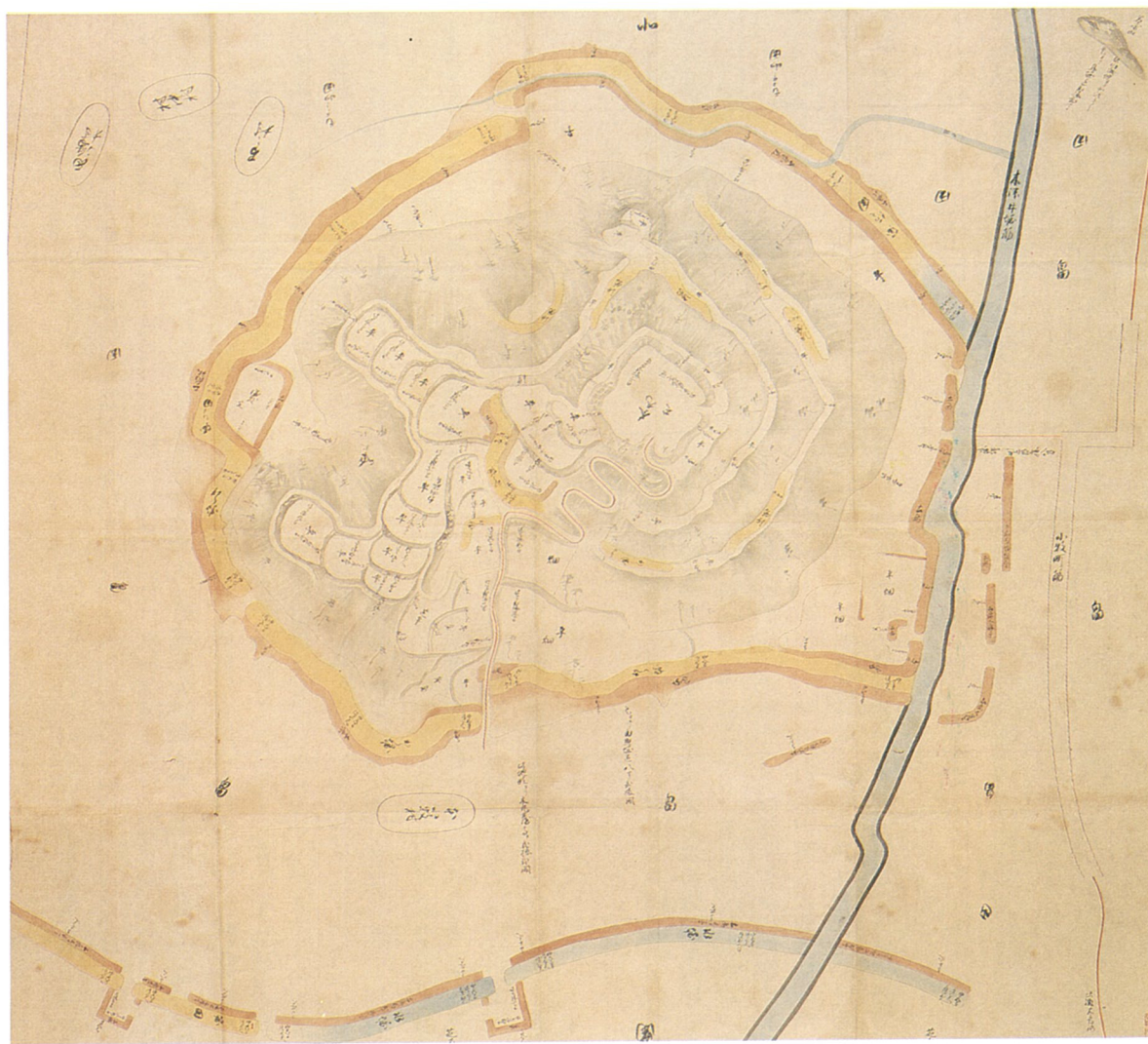
本図には、天明元年に、聖廟の東に建設された学寮が描かれ、標題に天明6年以前の名称である「聖堂」「演武場」が使用されていることから、ほぼこの間の様子を描いたものとみられる。



関ヶ原戦場図 (107.5×182.2cm) 江戸時代 1枚 付添書1冊

慶長5年(1600)9月15日、関ヶ原合戦における東西両軍の布陣の様子を地図上に描いた図。各々の位置で誰がどのような装備で部署についていたかなどを詳しく記した添書が付属している。屏風などに描かれた豪華華麗な合戦絵巻とは異なり、合戦の様子をより客観的に兵法上から学習するためのものである。

当文庫には、このような合戦図や古戦場図が約50点ほど伝えられており、その内約半分は、藩の重臣肥田孫左衛門家によって献納された合戦図・古戦場図のコレクション。関ヶ原の合戦図は7枚あるが、本図は、藩主の手元蔵書の内の一つではじめから藩主の軍学教材として調整されたものとみられる。



春日井郡小牧村古城絵図

江戸時代前期 1枚 135.0×159.0cm

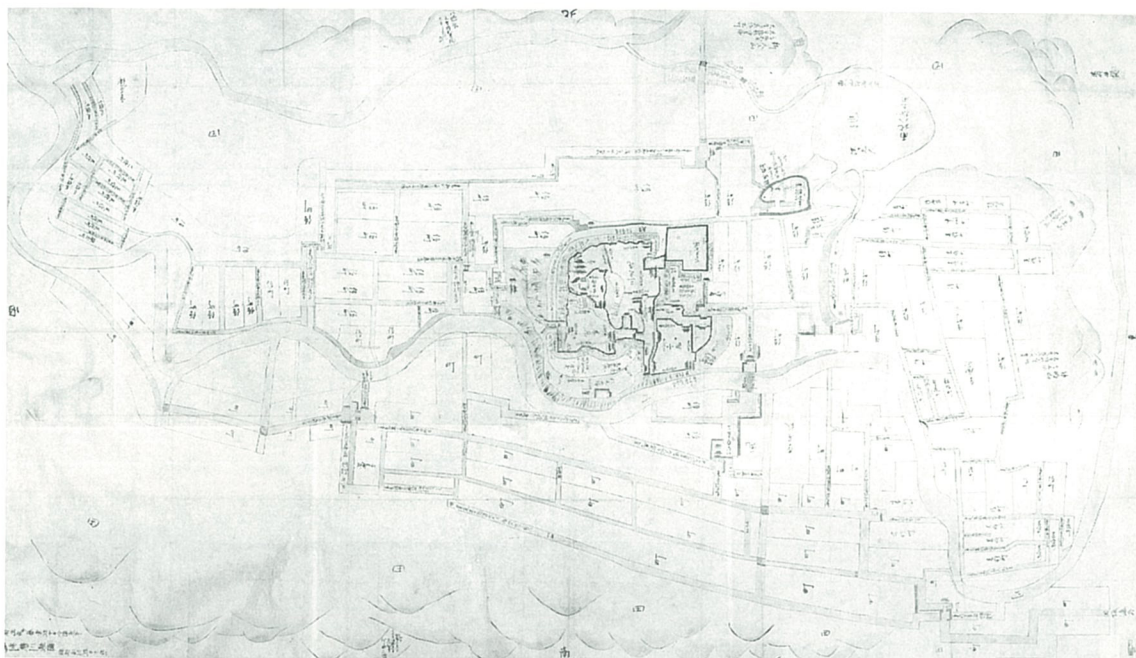
17世紀半ばごろの小牧山城跡（現小牧市大字小牧）の図。小牧山城は、永禄6年（1563）、織田信長が築城、美濃進出の拠点となった。天正12年（1584）の小牧・長久手の合戦で徳川家康と織田信雄の本陣となって後は、廃城となり現在にいたっている。

本図には、慶安3年（1650）に完成した木津用水は記されているが、寛文4年（1664）に竣工する新木津用水の記載はなく、この間の様子が描かれているものとみられる。

蓬左文庫には、本図と同種の尾張国内18ヶ所の古城跡を描いた図が残されており、どれも17世紀半ば頃の様子をかなり正確な測量によって描いたものである。現在のところこれらは、尾張藩が防衛上の拠点としての関心から作成したものと推定されている。

参考 遠藤才文等「尾張国古城考」（『愛知県中世城館跡調査報告1』）

享保元年に写された古城図



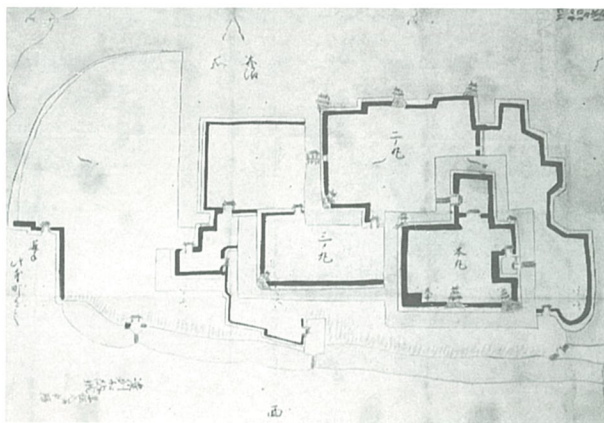
遠州掛川城図 享保元年写 150.0×261.0cm

この掛川城（現静岡掛川市）と加納城（現岐阜県岐阜市）の図にはどちらにも享保元年（1716）書写の端書と、同じ印記がある。ただし、掛川城の図が、幕府が編纂した正保の国絵図と共通した点があるのに対し、加納城の図は、軍学上の関心から描かれた縄張り図の色彩が強く、内容のもつ性格は異なる。

この2図については、この他にも同じ時期に写され、旧蔵者を同じくするとみられる古城図が82枚、さらに全国55国2島におよぶ国絵図60枚（内28枚は、現在徳川林政史研究所蔵）、古戦場図7枚、海路図その他7枚が尾張藩御日記所旧蔵図として伝わっている。

古城図と同様国絵図（蓬左45号P3「越前国之図」）についても記載内容の性格は一定せず、数種類の系統に属するものが含まれている。また、正徳6年（享保元年）の年記のあるものには「福富三郎右衛門殿ヨリカリ写之」と記されたものが数枚ある。（福富三郎右衛門（1634～1716）は、尾張藩士。寛文3年（1663）小路奉行、同13年からは藩内の巡見使を勤めた）なお、これらの図には、上記2枚に捺された印を含め三種の印記があるが、現在のところ判読不明。

印記、紙質、装丁など、はじめてから尾張藩によって作成されたものではないと推定される。天明元年（1781）に藩の文庫に納められた神村正隣（1728～72）、同忠貞（1740～81）の旧蔵書の中に200点余の国絵図・古城図などの大量の絵図類が含まれていたことが記録されており、現在のところでは、この一部であった可能性がもっとも高いとみられる。



濃州加納城図 享保元年写 38.6×56.6cm

一 閲覧室一

蓬左文庫所蔵目録の利用について

蓬左文庫には、現在約10万点の資料が所蔵されており、整理中のものを除き約8万点余が公開されています。その内の約6万7千点は、昭和25年、名古屋市へ移管された旧蓬左文庫蔵書（蓬左文庫は昭和10年より東京目白の尾張徳川家邸内で開館、蔵書の公開を行っていた。）、その他は、名古屋市蓬左文庫となってからの収集資料です。名古屋市移管後の収集資料のうち、随時受入れている新刊書以外は、数百点から数万点単位の受贈・受託が多く、それらは旧蔵者別の整理を行い、それぞれの冊子目録を作成してきました。

これまでに刊行した6種8冊の蔵書目録は、蔵書構成と目録編集上の構成関係がや、複雑なため、利用に際してとまどいが見受けられます。下表のような形で各蔵書群が収録されていますのでご参照ください。なお、各目録の巻末には書名索引がありますので検索の手がかりにいただければ幸いです。

目 録 名	収 録 内 容	点 数	概 要	判・頁 価 値
名古屋市蓬左文庫 国書分類目録	旧蓬左文庫所蔵の国書 (昭和25年徳川黎明会より名古屋市へ移管)	約65,000	尾張徳川家旧蔵書	B 5 320 P 4,000
名古屋市蓬左文庫 漢籍分類目録	旧蓬左文庫所蔵の漢籍及び準漢籍 (含、朝鮮本) (昭和25年徳川黎明会より名古屋市へ移管)		尾張徳川家旧蔵書	B 5 274 P 3,500
名古屋市蓬左文庫 古文書古絵図目録	旧蓬左文庫所蔵の古絵図 (昭和25年徳川黎明会より名古屋市へ移管)	約 2,000	尾州家旧蔵の各種の地図・ 絵図類	B 5 214 P 2,500
	洋書 (昭和25年徳川黎明会より名古屋市へ移管)	約 60	尾張洋学館旧蔵の蘭書	
	美濃高木家文書 (昭和25年徳川黎明会より名古屋市へ移管)	約 2,000	美濃国石津郡の旗本交代寄 合 東高木家文書	
	大炊御門家文書 (昭和25年徳川黎明会より名古屋市へ移管)	約 400	江戸時代の公家文書、有職 故実に関する文書典籍	
	尾州茶屋文書 (昭和43年受贈)	約 140	尾張藩特権商人の文書記録	
	山田千嶠旧蔵書 (昭和37年受託)	約 260	国学者山田千嶠・直臣父子 の自筆稿本類	
	小笠原家伝書 (昭和46年受贈)	約 510	故実礼法を家職とする朝岡 家の文書。小笠原流の伝書 が中心	
尾崎久弥 コレクション目録 1～3集	江戸文学を中心に各種 (昭和47年受贈)	約13,200	江戸軟派文学の先駆者・尾 崎久弥氏の江戸版本・明治 以降の活版本・複製本・雑 誌など	B 5 (110 105 135) P 各1,500
	堀田文庫蔵書目録		津島神社祠宮の流れを汲む 堀田家の蔵書	
蟹江慶次郎 旧蔵書目録	和書・漢籍を中心に各種 (昭和57年受贈)	約 3,200	明治・大正・昭和を通じて 愛知県の教育界で活躍した 氏の蔵書	A 5 71 P 500
その他の昭和25年以降受入資料については、閲覧室のカード目録を御参照下さい。。				

整理休館のお知らせ

蓬左文庫では、年末年始の休館に先立ち蔵書点検のため下記のように休館させていただきます。

利用者の皆様には、御迷惑をおかけすることになりますが、当文庫蔵書の末長い保存と活用のため、皆様の御理解御協力を賜りますようお願い申し上げます。

記

期間 平成3年12月10日(火)～22日(日)

(12月25日(水)～27日(金)は開館いたします。なお、年末年始の休館は12月28日(金)～1月4日(金)です。)

利用ご案内

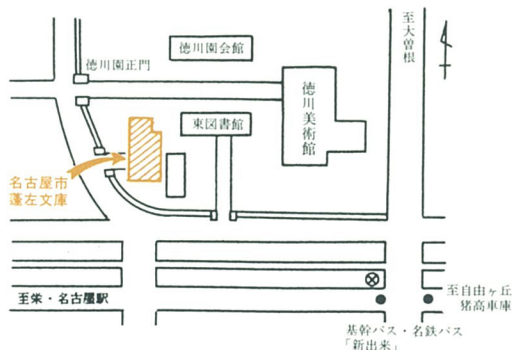
- ▷開館時間 午前9時30分～午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
- 祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
月曜 " 月・火休館
- 特別整理期間
年末年始(12月28日～1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません。
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 保存上影響のないものについて複写サービス(マイクロフィルム利用他)を行います。ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052) 935-2173

〈名古屋駅から〉市バス(基2)「自由ヶ丘」「猪高車庫」行
名鉄バス「本地ヶ原方面」行
〈栄から〉市バス(基2)「引山」「自由ヶ丘」
「猪高車庫」行
「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第46号 ☆平成3年10月5日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)